

19 世紀ゴリツィアにおける農工業の発展：
農業協会・商工会議所・養蚕試験場の設立から

**The Development of Agriculture and Industry in 19th Century Gorizia:
The establishment of the Agricultural Association, Chamber of Commerce
and Industry, and Sericultural Experiment Station**

井上直子（城西大学）
Naoko Inoue (Josai University)

Abstract

Gorizia (It: Gorizia, De: Görz, Fr: Gurize, Slo: Gorica) is the capital of the province of Gorizia in the autonomous region of Friuli-Venezia Giulia in northeastern Italy. An "autonomous region" is a region that has a unique historical background and geographical characteristics among the provinces that make up Italy and is granted absolute autonomy by Article 116 of the 1948 Constitution. Therefore, the very fact that it is an "autonomous region" means that it is a particularly heterogeneous entity even in Italy, which lacks a shared culture that symbolizes unity and integration.

The purpose of this paper is to examine the functions and roles of the Chamber of Commerce and Industry, the Sericultural Research Institute, and the Agricultural Association, which predated the Chamber of Commerce and Industry and the Sericultural Experiment Station by nearly a century, in promoting the local economy in Gorizia under the Austrian Empire from the mid-19th century until the outbreak of World War I. The purpose of this paper is to understand the peculiarities of Gorizia's industrial development supported by its Alps-Adriatic character.

キーワード：ゴリツィア、ゲルツ、フリウリ＝ヴェネツィア・ジューリア、オーストリア帝国、ハプスブルク帝国、19 世紀、農業協会、商工会議所、養蚕試験場、国境、トリエステ、ヴェネツィア、展示会、産業振興協会、職業教育、佐々木長淳

ゴリツィア（It: Gorizia, De: ゲルツ Görz, Fr: グリツェ Gurize, Slo: ゴリツァ Gorica）はイタリア北東部のフリウーリ＝ヴェネツィア・ジューリア自治州のゴリツィア県都である¹。「自治州」というのはイタリアを形成する諸州の中でも特異な歴史的経

¹ フリウーリ（It: Friuli, Slo: Furlanija, De: Friaul）現在のフリウーリ＝ヴェネツィア・ジューリア州ウーディネ県、ポルデノーネ県、ゴリツィア県およびベッルーノ県のコムーネ・サッパダに相当する広がりをもった地域で、ラテン語の Forum Iulii（カエサルフォーラムすなわち現在のチヴィダーレ・デル・フリウーリ）が語源。一方ヴェネツィア・ジューリアとはオーストリア沿岸地方 Litorale Austriaco のイタリア的文化特性を際立たせるために、分離

緯、地理的特性をもち、1948年憲法第116条によって絶対的自治権を与えられている地域である。従って、その「自治州」にあるということ自体が、そもそも統一・統合を象徴する共有の文化が欠如したイタリアでも特に異質な存在であることを意味する。

本稿の目的は19世紀半ばから第1次大戦勃発に至るまで、オーストリア帝国下ゴリツィアにおける地域経済振興を担った商工会議所や養蚕試験場、またこれらより1世紀近く先行して設立された農業協会という3機関の機能と役割について考察することで、ゴリツィアのアルプス・アドリア的性格に支えられた農工業の特殊性を理解することである。

1. 先行研究

日本における北東部イタリア国境地域の歴史研究は驚くほど少ない。山本真司によるフリウーリ語あるいはスロヴェニア語の言語学的研究を別にすれば、オーストリア帝国のとるに足らない「辺境」としてのわずかな情報が得られるのみである。史料館に残された一次史料を除けば、イタリアにおいても参考のできる文献資料は限られる。この原因については様々な見解があるが、現地の歴史研究者らの間で繰り返し語られていたのは、「イタリア人」は現地の言語・文化的多様性を理解できない上に「未回収のイタリア」に対する政治的立場を封印した禁欲的な研究に限られるし、「ドイツ（オーストリア）人」にとっては言語的困難に加え、大戦の記憶に刻印された「宿痾の地」としてのイメージが払拭できないことが背景にあるという。井上(2005)および同(2008)も、資料の大半をイタリア語、ドイツ語、スロヴェニア語による現地の一次史料をベースにしているのは、そうせざるをえない状況を反映している²。

本稿では、この「とるに足らない」ゴリツィアが明治初期の日本において、世界的に名の知られた養蚕試験場および絹糸紡績業の拠点として認知されるようになったのは何故か、また20世紀初頭まで日本と養蚕を介した技術交流が継続した背景に何があったかを明らかにする。

主義的思考とは一線を画す、ゴリツィアの言語学者イザイア・アスコリが考案した造語である。（Cattaruzza, *L'Italia e il confine orientale*, p. 80, Bologna, 2007. 参照）フリウーリにはウーディネ県とポルデノーネ県が、ヴェネツィア・ジューリアにはトリエステ県が含まれるが、ゴリツィアはどちらともいえない。

² 井上「国境を挟む協力：イタリア・スロヴェニア国境の町ゴリツィアの事例」、『ヨーロッパ統合と国際関係』日本経済評論社、2005年、及びINOUE, 'Lo sviluppo industriale e l'istruzione professionale nel Goriziano' in 『年報地域文化研究』第12巻（2009年3月）参照。

2. 地域特性

ゴリツィア県は面積 466 平方キロメートル、人口 14 万人強で 25 のコムーネ（市町村に相当）からなる。ゴリツィアの市街地は、北のアルプス前山に発しカルソ台地を抜けて流れ込む、アルプスでも有数の透明度を誇るエメラルド・グリーンのイゾンツォ川と、ゴリツィアの遥か東方、スロヴェニア中央部へと続くローマ時代からの街道と並走するヴィパッコ川に挟まれた格好になっている。2つの川が出会うのはゴリツィア南東のスラヴ系集落サヴォーニャ・ディゾンツォ Savogna d'Isonzo である。そのすぐ隣にある、ローマ時代の橋の遺構などが残る集落ファッタ Farra には、17 世紀半ばにゴリツィア初の製糸所がカルル 5 世の勅令によって建設されている。

またゴリツィアは北部、東部、南部の三方をカルソ Carso 台地に囲まれ、北西部にはコッリオ Collio (Slo: ブルダ Brda。共に「丘」の意味。) と呼ばれる丘陵地が広がっている³。唯一平野が開けた西部にはヴェネトとも歴史的に深い繋がりのあるフリウーリ平野が広がっている。カルソ台地は酸味の強い赤ワイン、テラン (Slo: Teran, It: Terrano) や白のヴィトウスカ Vitovska の生産地としても知られ、コッリオはイタリア、スロヴェニア両国で白ワイン生産地として認識されている。前出のサヴォーニャ・ディゾンツォやファッタは共にフリウーリの農村であるが、フリウーリ地方もまた白ワインに定評がある。

このようにゴリツィアは、三方を台地に囲まれた盆地のような地形をしており、北からアルプスを越えてやってくるドイツ人、東からのスラヴ人、西からのヴェネト人やフリウーリ人が集まる「フォーラム」的な性格を中世以来維持してきた。1001 年のオットー 3 世による寄進文書に初めてその名が記されたゴリツィア伯国は、16 世紀初頭のヴェネツィアによる占領期間を除き、1500 年以来ハプスブルク帝国領内で統一的な社会経済圏を形成してきた。その住民の大多数が母語としていたフリウーリ語は、スイス南東部のアルプス溪谷（グラウヴュンデン）で話されるロマンシュ語や、イタリア北部のドロミティ溪谷で話されるラディン語に近く、レト・ロマンス語群に分類されている。

しかし最後の神聖ローマ皇帝（在位 1792～1806 年）であり、初めてオーストリア帝国皇帝を名乗ったフランツ 1 世（在位 1804～1835 年）は、1816 年、ナポレオン占領下でリュブリャナ、カルロヴァツ、トリエステ、ザダル、フィラッハ、ゴリツィア、リエカ、ドゥブロヴニクなどを含むイリュリア州 (Fr: Provinces illyriennes, Slo: Ilirske province, Cr: Ilirske pokrajne, It: Province Illiriche) をイリュリア王国(It: Regno d'Illiria, De: Königreich Illyrien) として再編した。一方でゴリツィアを除くフリウーリ地方はロンバルド＝ヴェネト王国に帰属し、ゴリツィアは 1820 年、グラディスカ、アクイレイア、トルミン、プレッツォ地区を含むゴリツィア行政区として巨大なド

³ イタリア、スロヴェニア両国を跨いで広がる 430 平方 km ほどの石灰岩台地で、「カルスト Karst 地形」の語源ともなった。スロヴェニア語（以後 Slo と表記）でクラス Kras。

イツ連邦の一部となった。この出来事を境に、ゴリツィアの人々は西フリウーリと距離を感じ始めた⁴。

この頃のゴリツィアは、ナポレオン戦禍によって農業も、僅かばかりの手工業も徹底的に破壊され、人口も大きく減少していた。（表1）疲弊しきった地域経済を回復させる必要があったものの、ウィーン政府や土地貴族らの保守的態度に決定的な変化はみられなかった⁵。王国の新しい境界の内で馴染みのない人種や言語に囲まれ、息苦しさを感じるようになっていたゴリツィアの人々の「フリウーリの」メンタリティーは、その後1848年に自由主義革命を経ても変わることはなかった⁶。

このようにゴリツィアの特性は、フリウーリとも（アドリア海）沿岸地方とも異なる、アルプス・山岳的性格と地中海・海洋的性格を併せ持った「フリウーリ・ゴリツィアーノ」としての文化・社会的「境界性」にあった。1858年の商工会議所レポートには、「ゴリツィア地域はヴェネト諸県とその西端を接するフリウーリ県とは区別され、トリエステの行政区に従属」しているが、「ゴリツィアの地質、豊かな水資源、農業生産物、風俗、言語などが隣接する〔沿岸地方〕諸県との境界をなし、その自然や地勢、性格を特殊フリウーリのものとしている」という記述があり、こうした性格を「フリウーリ・ゴリツィアーノ（イッリリコ）」的であると表現されている。

一方、18世紀までオーストリアの辺境であるゴリツィアが国境を接していたのは、当時の先進国、ヴェネツィア共和国であった。次々と海外領土を失い、東方貿易のみでは立ち行かなくなっていたヴェネツィアは、16世紀頃には内陸の農業経営に頼るようになっていた。ヴェネツィアの絹産業はオスマン帝国やヨーロッパの広大な市場の需要に支えられていたが、そもそもヴェネツィアの後背地、テッラ・フェルマ（「動かない土地」という意味で現在のイタリア、ヴェネト州にほぼ相当）の養蚕業や製糸業の発展の結果もたらされたものである。テッラ・フェルマの手工業者や商人は共和国の重税に苦しむ一方で、オーストリアからは歓迎された。巨大な市場を抱えるも生産力と技術の限界があった重商主義の帝国はヴェネト商人のよい顧客となり、その経済活動はゴリツィアとフリウーリ地方の関係を補強するものとし

⁴ 2者の距離は元々乖離していたという見解もある。FANFANI, *Le contee di Gorizia e Gradisca nel XIX secolo*, Udine, 1979, p.2.参照。

⁵ ハプスブルク帝国の貴族は、その出身系統からすると極めて国際的で、ドイツ系、イタリア系、スペイン系の他、ネーデルラント系やフランス系も混じっていた。古来のプロイセン貴族が独自のルーツから出て数世代以上にもわたる不変性を示したのに反し、ハプスブルク帝国の貴族的上層部はその大部分が異民族で、連綿とした血統的由来をもたず、精神や態度においても国際的であった。ニコラウス・フォン・プレラドヴィッチが書いているように、プロイセン国家は固有の貴族を、オーストリアは「貸し出された」貴族を有した（シュタットミュラー『ハプスブルク帝国史』刀水書房、1989年、97-98頁参照）ともいわれる。こうしたオーストリア貴族の基盤の弱さは、その産業家としての資本や手腕の弱さでもあり、歴史的なオーストリア企業家層の弱さとしてあらわれている。

⁶ MANZINI e CANDUTTI, *La Camera di Commercio di Gorizia*, a cura della CCIAA di Gorizia, Gorizia, 1971, p.15.を参照。

て機能した⁷。ゴリツィアの絹産業に関わる人々は、ウィーンに送る公文書などを除き、ヴェネトの度量衡を使い続けた⁸。またゴリツィアにおける産業発展の兆しは前述のファツラに設立された製糸場の活動にみることができる。

1797 年、ナポレオンに侵略されたヴェネツィアは滅び、後にベルギーの領有権と交換にオーストリア領となったが、普墺戦争が始まるとイタリアはオーストリアに宣戦布告し（第3次イタリア統一戦争）、その結果ヴェネツィアとその後背地は1866 年、統一を果たしたばかりのイタリアに編入された⁹。

フランツ・ヨーゼフの治世下で独自の憲法と議会をもつ帝国の一行政区として組み込まれたゴリツィアは、1861 年にはゴリツィア・グラディスカ伯国として再編され、これ以降ゴリツィアはトリエステやイストゥリアと並んで沿岸地方（De: Küstenland, It: Litorale, Slo: Primorje）の一部をなし、その自治権を拡大していった。ユードーリオ川を挟んで隣り合うヴェネトがイタリアに割譲され、ゴリツィアの「境界性」は新しい意味をもつようになった。その産業構造は再度オーストリアの市場や港に向かって再編されたのである。ヴェネトから切り離されたフリウーリもまたウリウーリ・ゴリツィアーノとの相互依存をより一層深め、一体となったゴリツィア地方は国家主導の手厚い産業政策の恩恵にあずかった。オーストリアの資本はトリエステやウィーンへと引き戻され、ゴリツィアの絹産業にはトリエステや諸外国から資本が投下されるようになったのである¹⁰。

結果としてゴリツィアでは 19 世紀半ばより人口が増加し、ワイン、養蚕を柱とする農林業および、絹業や家具製造業を中心とした農林業関連工業の生産向上など、順調な社会・経済的発展がみられた。しかし第1次大戦の結果、沿岸地方は 1920 年にイタリアに編入され、都市部が後背地から切り離されたゴリツィアは帝国内で 400 年にわたって築き上げてきた社会・経済的関係を分断された。ゴリツィアはイタリアの中で再度、新たな「辺境性」を刻印されたのである。

さらに第2次大戦の結果、ゴリツィアはその市街地と後背地をイタリアとユーゴスラヴィアの国境線によって断絶された。この分断が文字通り「辺境」となったゴリツィア地方の発展を阻害することとなった。文化・歴史的な中心地から切り離されたユーゴスラヴィア側のノヴァ・ゴリツァは、ユーゴスラヴィア南部からの積極的な植民活動によってカジノ産業を中核とするニュータウンとして発展を遂げた¹¹。

⁷ PANARITI, *La seta nel Settecento Goriziano*, Milano, 1996, p.14. 参照。

⁸ 1 braccio = 5/6 vattolo (De: Vattel) また決済もヴェネツィア・リアによって行われるのが慣例であった。（1 lira = 20 soldi = 0.188 fiorini = 11,333 carantani）PANARITI, *La seta nel Settecento Goriziano*, Milano, 1996, p.11. 参照。

⁹ その間オーストリアは 1805 年にフランスが支配するイタリア王国に旧共和国領を譲ったが、1814 年に奪回。オーストリアは港湾都市としてはヴェネツィアよりトリエステを重視したため、ヴェネツィアの経済は衰退した。またその翌年ヴェネツィアとロンバルディアはロンバルド・ヴェネト王国を作った。

¹⁰ PANARITI, *La seta nel Settecento Goriziano*, Milano, 1996, p.14. 参照。

¹¹ 「ノヴァ・ゴリツァ」とは新しいゴリツィアという意味で、ニュータウンのような響きがあるが、19 世紀に「オーストリアのニース」と呼ばれ、保養地として有名だったゴリツィ

スロヴェニアがシェンゲン条約に加入した現在、ゴリツィアとノヴァ・ゴリツァの国境は相対化され、EU 構造基金によって促進される「国境を挟む協力」が進展し、越境通学・通勤・ショッピングが当たり前のように見られるようになった¹²。

ゴリツィアの地域特性を理解するため、最後に2点ほど補足したい。1つは宗教である。1751年にアクイレアの総大司教座が解体された際にゴリツィアに大司教座がおかれ、帝国内のカトリック行政の中心の1つとなった。ゴリツィア大司教座の管轄は、北はドラーヴァ川、東はコルパ川（スロヴェニア・クロアチア国境）まで、トリエステはもちろん、トレントやコモ、ペデナ（クロアチア）の司教座にまで及んでいた事実は、圧倒的マジョリティをカトリックが占めるイタリア・スロヴェニア国境地域において、民衆レベルでの地域アイデンティティ形成に大きな意味をもつのである。

2つ目は、ゴリツィアの周辺部（ゴリツィア東部、カナーレやトルミン、アイドゥッシナ、プレッツォ、ツェルクノ、コメン、セジャーナなど）のスラヴ系農村住民は、常にカルニオラの中心であるリュブリャナへの帰属意識を維持し続けたという事実である。多くのイタリア人研究者がゴリツィアの人々とヴェネト的フリウーリ人との深い繋がりに言及する一方、スラヴ系住民に関しては「ゴリツィア近辺の農村に住む、とるに足らない存在」として軽視する傾向が見られる。Il Friuli Orientale（東フリウーリ）を著したアントニオーニによれば、1857年には既にスラヴ系住民が過半数を占め、さらに13の内8の地区で支配的地位にあったという¹³。彼らは決してイタリア人やドイツ人に同化することなく独自の文化・社会生活を維持していたのである。これだけの存在感をもつスラヴ人に囲まれたゴリツィアではあったが、彼らが民族的自我に目覚めるのは19世紀も末に近づいてからである、というほとんどの既存研究がなぞるストーリーは未だに覆されてはいない。

3. 19世紀ゴリツィアの経済

オーストリアのような多民族複合社会の文化・歴史的構造は、資本生産ないし近代国家の総括性の枠組みの中だけで捉えきれるものではない。このような帝国の特

アで余生を過ごしたブルボン朝最後の王シャルル10世やその子孫が埋葬されるカスタンエヴィツァ修道院、第1次大戦中のイゾンツォの戦いによる傷跡を残すスヴェタ・ゴラ（聖なる山）、同じく大戦中の保塁や有刺鉄線などが放置されたサボティン山のオジモ道路（サボティン山も第2次大戦後にイタリア領に編入されたが、スロヴェニア側コッリオ「ブルダ」とノヴァ・ゴリツァの中心部を接続するため、1975年にサボティンを横切る道路が一部スロヴェニア領として認められた。）、オーストリアの中心部をイエセニツェ経由でゴリツィアと結ぶために敷設されたトランスアルピーナ鉄道のため、1906年に完成された世界第2位の長さを誇る石造アーチ橋、ソルカン橋、小さなカジノのすぐ脇にはユダヤ人墓地などを現在も見る事ができる。また現在のセンターよりイタリア寄りの歴史的居住区ソルカンSolkanは1960年代まで家具製造業でイタリアにおいてもその名を広く知られていた。

¹² 井上(2005)、201頁、参照。

¹³ ANTONIONI, *Il Friuli Orientale*, Milano, 1865, p. 301.を参照。

性を理解するためには、佐藤（1992）が主張するような「多元的地域主義把握」¹⁴が有効であろう。上述した通り、ゴリツィアや沿岸地方の経営史は帝国の他の「地方」と比べても研究の薄さが指摘されているが、これは概ね、言語的な制約と戦禍による資料の焼失によるものである。

ゴリツィアの「19 世紀」は、その社会・経済的発展がかつてないほど顕著にみられた時期であった。人口増加（表 1）、封建制からの事実上の解放、特に丘陵部における養蚕とワインを柱とした農業生産の向上、指物、製糸などの工業の発展、商業の発展、農業協会や商工会議所を中心とする地域の産業発展振興に関わる諸団体の拡充、職業教育の進展など、前時代とは一線を画す、ある程度の長さをもつ単線的発展がみられた時期であった¹⁵。ナポレオン災禍（1809-1815）や自由主義革命の混乱（1848）から立ち直り、再度、第 1 次大戦による決定的な破壊を被ってイタリアの下で「東」に対する防衛最前線として以上の重要性を喪失するまでの時期、ゴリツィアは町を取り囲む日当たりのよい緩やかな丘陵、石灰分を含む粘土質の土壌、豊富な水量、といった自然環境を生かし、観光業をはじめとする新しい産業を発展させた。そこには国境線の移動に翻弄され、衰退産業によって停滞が刻印されたイタリア統治下のゴリツィアとは一線を画す、オーストリア帝国下で 1 つの社会・経済圏を形成したゴリツィア伯国の姿を見出すことができるのである。

表 1 19 世紀ゴリツィアの人口

（ゴリツィア、モンファルコーネ、グラディスカ、セジャーナ、トルミン地区を含む）

年	人口
1811	87.246
1818	144.048
1827	162.928
1830	168.000
1833	175.000
1842	183.033
1847	195.511
1855	195.328
1857	196.835
1861	194.667
1869	204.076
1880	209.572

¹⁴ 佐藤勝則『オーストリア農民解放史研究』多賀出版、1992 年、p.5。

¹⁵ FANFANI, *Le contee di Gorizia e Gradisca nel XIX secolo*, Udine, 1979, pp.6-12. 及び PILLON, “Movimento della popolazione a Gorizia dalla metà dell'Ottocento ai primi anni del Novecento”, in *Economia e società nel Goriziano tra '800 e '900*, Mariano del Friuli, 1991, pp.123-154. 参照。

1890	220.308
1900	232.897
1910	260.721

出所) 1857年までは CZOERNIG, *Il territorio di Gorizia*, pp.34-35. 1861年以降のデータは Orts-Repertorien。

4. 19世紀ゴリツィアの産業振興

① 商工会議所

ここからは具体的に 19 世紀ゴリツィアの産業発展を、商工会議所、農業協会、養蚕試験場という 3 つの機関が果たした役割からみていく。はじめに、1850 年 8 月 12 日、ウィーン政府によって帝国に 60 設立された商工会議所の 1 つであるゴリツィア商工会議所についてみていく。ゴリツィア（ゴリツィア・グラディスカ公国領を含む）における社会経済的発展に欠かすことのできない商工業の発展、統計の作成、人材育成などを目的とする商工会議所の設立から初期の活動は、1850 年から 1903 年まで 3 代にわたって会頭を排出したリッテル家によってリードされた。

福音派牧師の息子、ジョヴァンニ・クリストーフ・リッテル Giovanni Cristoforo Ritter は、1782 年、フランクフルトで誕生した。フランクフルトとロンドンでの商人見習いの後、ジョヴァンニは 1809 年にトリエステへ移住し、ナポレオン戦争期の混乱に乗じてマルタから硝酸を運び込み一儲けしたらしい¹⁶。フランス軍の到着と共にフィウメ、ブダペスト、ウィーンへと移転し、フランス軍の敗退と同時にトリエステに戻った。密輸した弾薬を売り捌くなどして財を蓄えて、トリエステの地に製糖工場を設立し、1819 年にはそれをゴリツィアに移転 (Görzerzucker) させた¹⁷。税制上の優遇措置を背景に生産を拡大し、1829 年には von Záhony のタイトルを得て、1838 年に死去した。

ジョヴァンニの五男として 1816 年に生まれたエットレ Ettore は、後に「ゴリツィア大産業の父」と呼ばれ、ゴリツィア商工会議所の初代会頭となった人物である。エットレも父親と同様、商売の基本はロンドンでの見習いによって身に付けたらしい。父の死の直前にはゴリツィアへ戻り、トリエステの Rittmeyer 家との婚姻関係をきっかけに製糖工場の株価を上昇させている。転機となったのが 1843 年にゴリツィアのイゾンツォ川に沿った Strazig と Podgora 地区の工場を購入したことである。「ボロ切れ」の意味を持つ Strazig に近代的な粉ひき場や製材所を作り、イゾンツォ

¹⁶ RITTER, E., *Cronik und Stammbaum der Familie Ritter*, 1915. 参照。

¹⁷ 砂糖はハンガリー、ボヘミア、上・下オーストリア、スティリア、カリンツィア、フランス、イギリス、ブラジル等に輸出された。70 頭の馬でトリエステ港へ運搬し、運搬用の樽はハンブルクから招いた職人によって作られた。

の水力を利用して生産性を高めることに成功した。原料は地元のほか、ハンガリー、ロシアの小麦を使い、イギリス、フランス、ブラジルへと輸出した。3年後にはその成功を元手に、Strazig に綿紡績工場、副蚕糸（絹くず紡績）工場を設立した。絹業の副蚕糸を原料とする絹くず紡績はフリウーリやヴェネト、ロンバルディアなどの北イタリアで絹業を促進する帝国の産業政策を補完するもので、Rittermeyer家の従兄弟と共同経営を行い、50年代には大きな利益をあげたようである。さらにPodgoraの製紙工場を購入し輸出用高級紙を生産するようになった。このようにイゾンツォ川の岸边に煙突の煙が立ち上る「小さなマンチェスター」が出現した様子は同時代人にとって印象的だったようで、複数の史料に記録されている¹⁸。エツトレは1848年には市議員となり、1850年にはゴリツィア商工会議所会頭に選出、その後1861年に県議会下院議員となつて、1869年には男爵に叙せられた。（1878年死去）

Strazigの工場を引き継いだ弟グッリエルモ Guglielmo が1878年から会頭に就任し、Podgoraの製紙工場を継ぎ、1880年にカリンツィアでのセルロース生産に成功したエツトレの息子エウジェーニオ Eugenio が1885年から1903年まで3代目会頭として活躍した。

ゴリツィアにおける商工会議所の設立と組織

ゴリツィアの商工会議所はゴリツィアとグラディスカ県 (Provincia: Bezirk Hauptmannschaft)を管轄下におき、コミュニケーション、統計、経済発展に有用なサービスの振興・形成・育成を目的として1850年8月12日に設立された。

当時のオーストリア帝国憲法は特に国家経済を重要視しており、帝国内における60の商工会議所（オーストリア29、ハンガリー14、ロンバルド・ヴェネト17）の設立を促した。商工会議所の法規は1850年3月に遡る。

憲法第5条（6章36段）には、国家事業の他にも、航海、関税、銀行、通貨や、度量衡に関する規定を含む、商工業に関する一切を含んでいた。1850年3月18日法は、全国の商業会議所 *Camere di Commercio* を再編成し、正式名称を商工会議所 *Camere di Commercio e d'Industria* と改めた。1850年3月18日法の3条には、「商務省は、商人、工業家層の要望を聞き入れ、それぞれの会議所へ彼らの参加を促し、商工業の発展のため彼らに利益をもたらさなければならない」とある。（*Bollettino generale delle leggi e degli atti del Governo per l'impero d'Austria*, 1850, p.711）

全てのメンバーは商業、工業あるいは手工業に携わっており、工業税 (*l'imposta - industria - Gewerbesteuer*)を支払う。また全員が有権者で、商工会議所の資産申告書に記載されている納税額に応じて、大商業 *Grande Commercio*、小商業 *Piccolo Commercio*、大工業 *Grande Industria*、中工業 *Media Industria*、小工業 *Piccola Industria*

¹⁸ VAPENINI, “L’esposizione di Gorizia”, in *Atti e memorie della Società agraria di Gorizia*, VII (1868), p. 179 参照。

の5つの選挙グループに分けられた。それぞれのグループが選挙リストをもち、割り振られた数の評議員 *Consiglieri* を選出した。例えばある商工会議所に24人の評議員が振り当てられている場合、12人は商業（大商業から8人、小商業から4人）から、12人は工業（大工業から6人、中工業4人、小工業からは2人）から選出された。評議員は政府機関代表に招集され、4年の任期で会頭、副会頭を選出した。それから執行部のメンバーを商業、工業それぞれに3人ずつ選んだ。

それぞれの会議所は問題がある時にはいつでもメンバーを招集し、工業税の追加徴収の額を決めながら、見積の決定を下し、決算書や活動報告を承認していった。議題は会議所のイニシアチブによって決定する以外に、評議員や関係諸機関によって投げられることもあったが、すべての議題はウィーンの会議所商業政策本部 *Centrale politico-commerciale delle Camere-Handelspolitische Zentralstelle* に報告された。

会議所の事務所は1人の事務官 *Segretario* が管理していた。事務官は資産申告書やアーカイブ、法規集や条例集を更新し、それぞれの地域の経済状況、商取引関係、共通の関心や行動について月例報告のなかで詳述し、商務省や県諸機関、他の会議所などへ送った。会議所の雇用者は国家公務員と同等であった。副事務官 *Vicesegretario* は、工場のサンプル、モデル、商標などの登録、サンプルの採取、保証書の発行、評価鑑定などを担っていた。

会議所は商務省に意見や提案、能力や関心事項、通信記録などの情報を供与するのみならず、政府の仕事を遂行し、年次レポートを作成したり、被選挙資格のある評議員の記録、地域の全会社の活動や社員、工員数などの情報を更新したり、さらには株式仲買人を試験・任命したり、融資、株式市場についての見通しを示した¹⁹。

ゴリツィア商工会議所初期の活動と評判

1850年9月11日には初会合が開かれ、組織編成や事務官の公募が決定された。また次の会合で会則が定められ、予算案が作られた。このときゴリツィアでは、ごく僅かな「啓蒙的ブルジョワジー」を除き、誰もこの新しい組織に関心を示さなかったという。商人や工業家達はむしろ、増税を疑い敵対心をむき出しにしたという記録すら残っている。自由主義革命の争乱をへて大衆の心情変化にたいへん敏感になっていたウィーンの中央政府は慎重な姿勢を崩さず、発足間もない会議所にとって必要不可欠であり法文上の義務でもあった支援を惜しむどころか、はっきりと否定的な態度を示す有様であった。ウィーンにとって、ゴリツィアにおける会議所の設置は、1850年の通達を受けた義務的行為に過ぎず、個別具体的にゴリツィアの重要性が認識されていた訳ではなかったのだ。しかし帝国辺境のゴリツィアでも、ごく少数ではあるが、会議所を「地域の社会経済を救済する固い決意の出発点」と捉えた者も存在したのである。

¹⁹ MANZINI e CANDUTTI, pp. 17-19.

保守的で敵対的な民衆も、緊急な問題に対する会議所のイニシアチブや迅速かつ効果的な対応を目の当たりにして、徐々に警戒心を解いていった。たとえば 1851 年には、会議所はゴリツィアにイタリア語と任意の他言語〔この場合ドイツ語とスロヴェニア語を指す〕を選択できる中等技術学校を設立するよう、ウィーンに請願書を送り、未成年者の義務教育のための法整備を市役所に説得したほか、ゴリツィア初の郵便電報局の設置に尽力しウィーンの株価が時々刻々と伝えられるようになったことなどが挙げられる。

ゴリツィア商工会議所によるインフラ整備

多くの市民の無関心をもって迎えられたお仕着せの商工会議所は、地域の啓蒙主義的ブルジョワジーらの活動に支えられ、ゴリツィアの経済発展にとって最も重要なイニシアチブを達成していった。即ち、鉄道、職業教育、教育的展示会である。

ウィーンをトリエステ経由でウーディネと結ぶ「南部鉄道」をゴリツィアも通過させようという動きが出たのは商工会議所の設立とほぼ同時期であり、これがゴリツィア市民や周辺住民の会議所に対する関心を決定的にした。しかしプロジェクトが動き出せば予測される増税に対するゴリツィア民衆の反応を恐れたウィーン政府は、1852 年、会議所に即刻の解散と、追加的増税の停止を指導した。しかし評議員は政府にその取り消しを求め、返事を待つ間にも、会頭と評議員は会議所の維持に必要な経費を算出し、その一部を集めることに成功した。こうした断固とした姿勢は、市民のみならずウィーン政府の支持をもとりつけ、「評議員の愛国的な行為」を賞賛するコメントとともに解散要求は取り下げられた。このようにしてゴリツィアの商工会議所は初めての戦いに勝利を収め、以後地域経済振興のために自発的に広範な活動を繰り広げていった。

世紀転換期にはいよいよ軍事目的でウーディネ（イタリア）を通らず、ゴリツィアを直接帝国の首都と結ぶアルプス越え鉄道「トランス・アルピーナ」（1906 年開通）の敷設が決定する。その利権に加えて、高まる民族問題を反映し、急速な発展を遂げる地域経済とは対照的に、ゴリツィアの社会問題は緊張の度合いを高めていったのである。

また地域経済の均等な発展のため、他の市民団体やトリエステやウーディネの会議所などと協力しながら、アルプス越え交通を再活性化したり（プレディル峠）、イゾンツォ川やトッレ川の架橋をすすめたり（ピエリス Pieris、ヴィッレッセ・ルーダ間など）しながら道路を整備し、主要な村落における郵便電信局設置を通じて県内各所へのアクセスを改善した。会議所はまた、灌漑水路を建設し、低フリウーリ地方の干拓事業でもイニシアチブを発揮した²⁰。

²⁰ 80 年以上に渡る研究によって実現されたドットーリ水路 Canale de Dottori も当時の事業の一部である。この水路によって、イゾンツォ川の水をサグラードからモンファルコーネの河

ゴリツィア商工会議所と職業教育

「教育を受けた労働者がいて初めて進歩が達成される」という認識のもと、会議所は設立初期から途切れることなく、労働者、職人、農民らの物質的・精神的向上、「徒弟制 *apprendistato*」の近代化、未成年労働や労働時間の規制、工業・農業生産システムの近代化、公正な賃金、労働者住宅の建設のために尽力した²¹。また 20 世紀初頭には、トリエステ経済への依存から脱却するため、「産業振興協会」が設立され、家具職人、靴職人、椅子職人、パン職人、商人、仕立屋、洋裁師など、様々な職業教育コースを設置した。業種や講師の使用言語など、それぞれの集落に適合したコースをゴリツィアのあらゆる場所で開催したことが当時の報道ぶりからも明らかである²²。こうした試みは前世紀末からフリウーリ地方でみられるようになっており、商務省や商工会議所、地域社会などの協力を得て大きな成果を上げたマリアーノの事例がその代表格である。

ヴェネトとの国境に近いフリウーリ平野の集落マリアーノでは 18 世紀から家族協業による椅子製造業が発達していたが、第 3 次イタリア独立戦争の結果 1866 年にヴェネトという巨大な市場を失い、73 年の金融危機の煽りを受け、19 世紀末には壊滅の危機に瀕していた。その際、職人らの要請に答えてウィーンが派遣した商務省官僚のイニシアチブにより、1880 年、マリアーノに学校兼工場が設立された。以降、技術革新や新規市場の開拓によって、地域経済の振興に大きな役割を果たしたのである²³。また当時新たな可能性を模索してイタリアに編入されたフリウーリの中心地ウーディネに近いマンザーノにマリアーノから居を移す職人が続出したが、現在マンザーノは日本でも人気のあるモダン家具メーカー、カリガリス *Calligaris* (2020 年売上 1 億 4200 万ユーロ) が本社を置くことで知られる。またマンザーノを含むウーディネ周辺の平野部には家具の産業集積が見られ、セーブル・ピオリ (1994) の「柔軟な専門化」論でも取り沙汰されたサード・イタリー (第三のイタリア) の一画でもある²⁴。マンザーノはかつてイタリアの輸出産業だった椅子生産の中心地で、前世紀にそのシェアはヨーロッパ市場の 50%、世界市場の 30% を占めていたこともある。主に低中品質の商品で中国との競争にさらされると、原材料の加工工程は、原料供出国であり労働コストの安い旧ユーゴ諸国など中東欧へと国外移転が進んだが、

口に流し込めるようになり、地域の治水に貢献するのみならず、灌漑もすすめることができた。アルプス麓の乾燥地や湿地から利益を生み出し、期待される工業化の原動力となりうる水力エネルギーを供給した。（現存するモンファルコーネの造船所も、1908 年の設立当初からこの水路のエネルギーを利用していた。VALENTI, Paolo, *Storia del Cantiere Navale di Monfalcone*, Trieste, 2007, p.21.）

²¹ *Rapporto*, 1973, p.8. 参照。

²² INOUE, *Le industrie goriziane e l'istituto per il Promovimento delle industrie in Gorizia 1902-1914*, Tesi di dottorato, Trieste, 2008.

²³ F. FILIPUT, *La scuola industriale di Mariano (1880-1931)*, in “Studi goriziani”, vol. LXXXII (Luglio-dicembre 1995), pp. 131-134, ed anche F. FILIPUT, *L'arte della Sedia: il Consorzio Industriale Falegnami di Mariano 1883-1935*, pp. 10-17. 参照。

²⁴ セーブル・ピオリ『第二の産業分水嶺』筑摩書房、1993 年、参照。

製品企画から最終製品の組み立て・仕上げなど付加価値の高い工程は同産地内で行われている。現在もウーディネ周辺は家具産業の一大拠点として高い付加価値を誇る産地を形成しているのである。

ゴリツィア商工会議所と展示会

設立当初から地域の生産品を供給する市場を開拓し、他地域との競争を制する必要を感じていた商工会議所のメンバーは、帝国やパリ、ロンドンなどヨーロッパの先端工業地域において開催された展覧会への参加を地域の工業家に奨励した。ゴリツィア、グラディスカ、セジャーナ、トリエステなどの町やさまざまな市民団体と協力しながら、1853年に農業協会によって振興されたゴリツィアでは初めての展覧会である「農産物および工業製品展」（参加者 154 名、訪問者 6832 名）の準備が行われた。ゴリツィアの生産者らの展示会への熱心な参加は、ウィーン博覧会（1862、1863、1872 年）、ロンドン博覧会（1862 年）、ハンブルク博覧会（1863 年）、パリ博覧会（1867 年）、トリエステ（1871 年）でも確認することができる。

② 農業協会

一方、オーストリアは 19 世紀半ばに至っても、なお封建制を残した後進農業国であった。先進列強の側圧にさらされながらも、オーストリアの資本主義的発展は緩やかなものに留まっていたが、世紀転換期になってようやく「農工業国家」へと転換を遂げ始めた²⁵。こうした特徴はゴリツィア社会を見てもそのまま当てはまることわかる。（表 2、3 参照）農工業社会の構造を理解するためには、地域の農工業に関連する組織やその活動に注目することである。ここでは 19 世紀半ばに商工会議所や養蚕試験場が設立されるまでのおよそ 1 世紀にわたり、ゴリツィアで地域の産業振興を担ってきた唯一の機関である、農業協会についてみていこう。

表 2 オーストリアの就業構造 1869-1910

1869	67.2%	19.7%
1890	62.4%	21.1%
1900	58.2%	22.2%
1910	53.1%	24.0%

出典) GROSS, “Austria-Hungary in the world economy” in *Economic Development in the Habsburg Monarchy in the XIX century*, New York, 1983, p.30.

²⁵ 佐藤勝則『オーストリア農民解放史研究』多賀出版、1992 年、3 頁。

表3 1890年ゴリツィアの就業構造

分野	(人)	割合 (%)
農業	155,259	70.47
炭坑・鉱山	141	0.06
工業	38,744	17.5
商業	8,114	3.68
交通・運輸	3,439	1.56
役所	6,370	2.89
専門職	528	0.24
年金受給者	4,688	2.13
軍人	1,227	0.556
その他	1,798	0.816
合計	22,308	100.00

出所) *Rapporto statistico sulle condizioni dell'economia nazionale nel quinquennio 1891-1895 nel distretto della Camera di Commercio di Gorizia*, Gorizia, 1898, pp.14-21.

ゴリツィアにおける経済活動は、18世紀前半、カール6世の治世（1711-1740）まで、投機的な小麦などの穀物販売くらいしかみられなかったという。オーストリアに商工業発展の契機がみられたのは18世紀半ばから末期にかけて、マリア・テレジア(1740-80)からヨーゼフ2世(1765-90)に継続された啓蒙主義的諸改革や経済政策によるところが大きく、1765-80年頃のオーストリアは大いに発展した。アルプス地方やブデーテン地方、また肥沃なボヘミアの地もその工業生産性を高めた。それに伴い、オーステンデやトリエステの海外貿易も成長し、帝国の経済に重要な役割を發揮するようになった。

ゴリツィア周辺では、まずグラーツに商業委員会 *Giunta di commercio* が設立された。またその指導下でゴリツィア初の製糸工場がファッラ Farra という集落に建設された。商業委員会は1731年にリュブリャーナで沿岸地方の商業を管轄する「オーストリア沿岸地方商業監督局 *Sottointendenza di commercio dei luoghi litorali austriaci*」へと転換され、これが2年後にゴリツィアへと移転してきた。その後、監督局は管轄事項の内、絹の売買や商人間の度量衡の係争に関わる全ての案件を為替局 *Giudizio di Cambio* の所管に移し、その役目を終えた。1756年には為替局から商業部門が独立し、ウィーン商務局 *Direzione di commercio di Vienna* 直属の商業司法局 *Magistrato di commercio* が設置され、1764年に商業会議 *Consesso di commercio* へとその名前を変

えた。1776 年にウィーンの商業会議が廃止されると同時にゴリツィアのそれも廃止されたのである²⁶。

一方、1765 年、マリア・テレジアの勅令によりゴリツィアの農業振興を目的とする農業協会 *Cesarea Regia Società di agricoltura nelle principate Contee di Gorizia e Gradisca* が設立された。18 世紀半ば、ヨーロッパで高まる科学的農法への関心は、ゴリツィアをも生産性の高い農業へと向かわせ、マリア・テレザはこうした要望を、1765 年に帝国全ての県で産業協会を設立するという形で聞き入れたのである。

協会は常に独立した形態をとっていた。当初資金は会員からの寄付でまかなわれ、協会の活動の一切が無給で行われた。初代会長ランティエーリ男爵の下、22 人の会員がそれぞれ 22 の地域で、調査・研究を開始した。彼らは多くの農民や農業研究家に農法などの情報提供を求め、そうやって集めた情報を地域に普及させ、実験や改良を行い、新たな農法の発見に努めた。設立から間もない時期に、協会の精力的な活動の広がりを評価した地方政府は協会に対する年 400 フィオリーニの補助を決定した。また同協会における農業実験への参加のため、協会に試験・実験用の土地を安く貸すものもあらわれた。この協会で執行部が最大の成果と捉えたのは、多くの農民がメンバーとなり、農民の声を直接聞くことができた点である。そこには執行部も農民も自由に議論できる空気が流れていたという²⁷。

協会の活動はやがて、農業のみならず、手工業や商業などへと広がっていった。前述の通り 1776 年にはゴリツィアの商業会議が廃止されたが、農業協会がその機能を引き継ぎ、農業・手工業・商業協会 *Cesarea Regia Società di agricoltura, arti e commercio delle Principate Contee di Gorizia e Gradisca* へと名前を変えた。また 1782 年からは協会が集めた資料や実験結果をベースにした論文の出版を始めている。

1850 年代には更に活動の幅が広がり、会員らの国際展覧会への参加もみられるようになった。より重要だったのが、50 年代から問題視されるようになっていた蚕やブドウの病気への対応である。農業協会は、69 年にゴリツィアに設立された養蚕試験協会との協働に積極性をみせた。メンバーも順調に増え、専門性の高い定期刊行物や論文がロシア語やセルビア語などを含む複数言語で出版されていた。農業機械や動物飼育など、常に付加価値の高い活動の可能性を模索し、1862 年のウィーン展覧会では始めて受賞もした。農業学校設立への期待の高まりを受け、農務省と農業協会は、その実現への努力も続けた。

1870 年には規約が変わり、事務官は有給となり、給与支給のため政府から補助金もついた。またこの年には 100 人の新会員を迎え、農業協会はイストゥリア、トリエステ、ゴリツィアの 3 つに分かれた。このように地域の信頼を獲得し、成長を遂げた農業協会は農業問題の権威として、あらゆる機会にその助言を求められた。その影響力の大きさは民法改正に多くの助言を与えていることから推し量られる。

²⁶ CLARICINI, *Gorizia nelle sue istituzioni e nella sua azienda comunale durante il triennio 1869-1871*, Gorizia, 1873, p.342. 参照。

²⁷ CLARICINI, p.324.

1872年にはゴリツィアの幾つかの集落にワイン醸造協会もできた。ミネラル肥料、地質の研究、新しい家畜の飼育方法の模索、顕微鏡など先端技術の導入以外に、農業用図書館、農業学校における教師育成コースの増設、統計資料の拡充、干拓事業など、その活動はさらなる展開を遂げた。

協会はこの後も、帝国農業協会 I. R. Società agraria、帝国テレジア農業協会 I. R. Società Agraria Teresiana di Gorizia (1910) などと名前を変えていったが、1870年規約にあるように、農業協会の最大の目的は常に、農業および農業関連工業の振興にあった²⁸。

③ 養蚕試験場

農業協会でも言及したが、沿岸地方の地元紙からは1860年代末のゴリツィアが、フィロキセラなどブドウの病害に苦しめられていた様子が分かる²⁹。この時期のゴリツィアでは農業危機が地域の経済問題の中心であり、69年にはファッラの絹製糸場以来の伝統があり、蚕糸業の北限とも言われるゴリツィアに養蚕試験協会 Istituto Bacologico sperimentale が設立された。

1867年に政府が開催した養蚕会議（ウィーン）では、オーストリアにおける養蚕業の振興について話し合いがもたれたが、そこで養蚕研究を目的とする養蚕試験協会の設立が提案された。農務省は7人の養蚕エキスパートからなる委員会を組織したが、そのメンバーの1人がゴリツィア商工会議所2代目会頭グッリエルモ・リッテルだったのである。翌年開かれた会合において協会をゴリツィアに建設することが決定し、規約が作られた。その中には、協会設立の目的として、

1. 蚕の生育に適した条件に合う環境を実現し、生産性を向上させること
2. 十分な質の蚕卵を作る最良の方法を研究すること
3. 蚕によく見られる病気の原因を究明すること
4. 新しい種類の蚕の研究
5. 養蚕業者への助言や教育

の5点が挙げられた。また初代会長には、1869年、ウンガリッシュ・アルテンブルク農業アカデミー Academia agrarian di Ungarisch-Altenburg のフェデリーコ・ハーベルラント Federico Haberlandt 教授が選出された。

1回目にウィーンで開催された養蚕会議も2回目はその3年後、1870年にゴリツィアで開かれている。ゴリツィアの養蚕試験場では日本の工部省官僚も滞在して講義を受け、持ち帰った知識をもとに日本初の養蚕試験場が東京（内藤新宿）に誕生し

²⁸ Claricini, p329.

²⁹ 例えば1868年に、1853年以来ゴリツィアで2度目の展示会「園芸・造園展」が開かれるまでの15年の空白について、農業危機に対してオーストリアが何の対応もとらなかったことに原因の一端がある、という批判が掲載されている。“L'Osservatore triestino” del 18 maggio 1868.を参照。

た。ゴリツィア養蚕試験協会の重要性については場長が残した年次報告や日本の養蚕業について記した報告書からも知ることができる³⁰。後者の報告書は、かつて日本からの使節団を受け入れた場長ボッレが、その際に試験場で学んだ工部省官僚、佐々木長淳の息子である東京農林学校（後の帝国大学農学部）教授の佐々木忠次郎博士(1857-1938)の案内で日本の主要な養蚕地域を訪問し、この調査を元に「運に恵まれた〔日本の〕養蚕業者の秘密」を解説するものである。この試験場はまた、73年のウィーン万博でゴリツィアからの参加団体として唯一「進歩のメダル」を受けている³¹。

結び

このように、ゴリツィアはヴェネツィアと歴史的に関係が深いフリウーリと沿岸地方の狭間にある、帝国辺境にその社会・経済圏を築いた。ブドウや桑の栽培、蚕の飼育に適した温暖な気候を生かしてその生産性を向上させるため、ゴリツィアの地域エリートらによる近代化への期待の高まりを背景に設立されたのが帝国農業協会であった。協会は地域農民や農業研究者らの知識や経験を集約し、最新技術を導入した実験、専門コースの設置や機関誌の発行、情報の周知などの活動を行った。

一方19世紀半ば、オーストリアの経済政策の一環としてゴリツィア「にも」誕生した商工会議所は、その設立の経緯からも広報的な役割が否めず、地域住民からは無関心をもって迎えられたが、地域の喫緊の課題に対する適切かつ迅速な対応によって信頼を獲得することに成功した。やがてはインフラ整備、職業教育、展覧会、とその活動の幅を広げ、地域発展の基盤を作ったのである。

オーストリアにとって重要であった養蚕業が病原菌の被害によって脅かされるようになると、これら2つの機関が緊密に連絡を取り合う中、1869年の養蚕試験協会が誕生した。19世紀末のゴリツィアには、地域の声を吸い上げ、必要な施策を中央政府の支援を受けながら実行に移す好循環が生まれていた。諸機関の協力・連携、そしてそれを支えた地域の実業家の熱意と献身によって、近代化の途についたゴリツィアであるが、第1次大戦後はイタリア王国の下で停滞を余儀なくされるのである³²。本稿で明らかにしたゴリツィアの地域特性とそのポテンシャルが再発見されるのは、冷戦が終わり、ユーゴスラヴィアからスロヴェニアに変わった国境線の向こう側がEU、更にはシェンゲン協定に加盟する段階であったと言える³³。

³⁰ BOLLE, *Annuario dell'i. r. Istituto bacologico sperimentale di Gorizia*, Gorizia, 1873, p. V., anche BOLLE, *La bachicoltura nel Giappone*, Gorizia, 1898.

³¹ ASPG, *Atti degli Stati Provinciali Sez. II*, b. 606 I, II e b. 607.

³² INOUE(2008), p.92 を参照。

³³ 井上(2005) 参照。